

朝鮮後期戸籍大帳僧戸秩及び 新式戸籍僧籍の性格（上）

山 内 民 博

は じ め に

朝鮮時代、僧の戸籍への登載は17世紀後半から本格化し、現存する各地の戸籍大帳に寺・僧の記載がみられる。また、19世紀末葉には戸籍制度が大きく変化し、新たな形式の戸籍が作成されたが、新式戸籍⁽¹⁾とよばれるこの新たな形式の戸籍中にも僧籍と称すべき戸籍が含まれている。

戸籍の寺・僧記事は、寺・僧に関する具体的な情報を伝えるとともに、戸籍が、ひいては国家が僧という社会集団をどのように把握し、位置づけていたのか、そしてまたそれがどう変化していたのかという問題を考える上でも重要な史料となりうるものであろう。しかしながら、朝鮮後期以降の戸籍寺・僧記事に関する既存の研究は乏しい。そのなかで新式醴泉郡の僧籍を検討した金甲周⁽²⁾の研究は貴重な成果であるが、対象が新式の一地域・単年度の僧籍ということもあり、戸籍の寺・僧記載の歴史的性格という面についてはまだ残されている課題が多い。また、筆者はさきに慶尚道安義県戸籍大帳の僧戸記事を検討した⁽³⁾が、これも一地域・19世紀に限定されていた。

そこで、本稿では17世紀後半以降、比較的豊富な寺・僧記事の残る慶尚道大丘と蔚山の戸籍をとりあげ、寺・僧の具体相をさぐるとともに、戸籍の寺・僧把握のありかたを考えてみたい。まず、17世紀後半から19世紀にかけての大丘府戸籍大帳の僧戸記載を、ついで同時期の蔚山府戸籍大帳の僧戸記載を検討

(1) 新式戸籍は主たる作成時期の年号をとって光武戸籍とも称される。

(2) 金甲周「光武年間の 僧籍에 대한一考 一醴泉郡을 中心으로」『何石金昌洙教授華甲紀年史学論叢 歴史学の諸問題』범우사、1992年。

(3) 山内民博「朝鮮戸籍大帳の寺・僧把握—慶尚道安義県戸籍大帳の分析から—」『環日本海研究年報』（新潟大学現代社会文化研究科）13号、2006年。

し、最後に同じ蔚山の19世紀末・20世紀初頭の新式僧籍について分析をくわえ、朝鮮後期の寺・僧把握が甲午・光武改革期にどう変化したのかを追跡する。

1 大丘府戸籍大帳の僧戸記載

(1) 大丘府戸籍大帳僧戸秩の概要

慶尚道大丘都護府（大丘府）は朝鮮後期、慶尚道の監營（觀察使營）が置かれた大邑で、大丘府で作成された戸籍大帳は17世紀から19世紀にかけての187冊⁽⁴⁾が残る。この現存冊数は邑（郡県）別にはもっとも多く、戸籍研究において早くから注目されてきた。戸籍は3年ごとの式年に作成され、大丘府では各式年複数冊の大帳に戸口を分録した。各冊は面・里ごとに戸口を記載するが、末冊の通常の面里戸口記事の後、末尾部分に寺庵がまとめて載せられている。大丘府戸籍大帳の表紙には収録面名が墨書されるが、末冊の場合、面名に並んで「僧戸」と記されていることが多い。そこで以下では、各式年末冊の寺庵記載部分を僧戸秩と称することにした。現存大丘府戸籍大帳は61式年におよぶが、僧戸秩を収録した冊は24式年24冊にとどまる。その最古の大帳は1681年（肅宗7年辛酉式）のものであるが、この大帳は表紙を含め落丁が多く、僧戸秩も完全な形では残っていない。比較的状态のよい桐華寺の冒頭部分をあげてみよう。

桐華寺

戸良僧智仁、年陸拾伍丁巳、本星州、父正兵李春億、母良女李召史、本全州、率上佐良武京改名就洽、年貳拾壬寅

「戸」字ではじまり、戸の筆頭者（以下、戸主と称する）として「良僧智仁」

(4) ソウル大学校奎章閣韓國学研究院蔵。韓榮國「朝鮮王朝戸籍의 基礎的研究」(『韓國史学』6, 1985年)が現存各冊の概要を示している。なお、大丘府の戸籍大帳には表紙に「慶尚道大丘府丙午式帳籍」など「帳籍」と題されているものが多い。ここでは、朝鮮時代戸籍の台帳の総称として「戸籍大帳」という表現を用い、大丘の戸籍も「大丘府戸籍大帳」と称することにする。

(5) 代表的なものに四方博「李朝人口に関する一研究」(同著『朝鮮社会経済史研究(中)』国書刊行会、1976年。原載『朝鮮社会法制史研究』京城帝国大学法学会論集第9冊、1937年)、同「李朝人口に関する身分階級的觀察」(前掲『朝鮮社会経済史研究(中)』。原載『朝鮮経済の研究 第三』京城帝国大学法学会論集第10冊、1938年)がある。

と記されている。以下、この智仁の年齢・生年干支・本貫・父の職役と姓名・母の姓氏本貫がつづき、その後に「率上佐」として上佐、すなわち弟子の名と年齢・生年干支が載せられる。「上佐良武京改名就洽」は上佐である良身分の武京を改名した就洽と解される。本戸は良僧智仁とその上佐就洽の2口からなるわけである。

各寺庵は上記のような戸を単位に僧・上佐などが記載されている。この1681年の桐華寺には62戸が並んでおり、桐華寺のほかにも少なくとも6寺庵がみえる。さきにふれたように、僧の戸籍への登載が本格化するの⁽⁶⁾は1675年（肅宗元年）以降のことで、同年の「五家統事目」施行などの一連の戸籍制度改革と関連していた。1681年の大丘府僧戸秩の記事は戸籍への僧記載が広まった最初期のものといえる。

1681年以降、もっとも新しい1876年まで24式年⁽⁷⁾の大丘府戸籍大帳僧戸秩の寺庵名および寺庵別戸数を示すと表1となる。僧戸秩の寺庵をすべて数えると25寺庵になるが、表では掲載式年数の少ないものについては「その他寺庵」にまとめた。

24式年全年度に登場する寺庵はない。これは1681年以降、18世紀までの僧戸秩に落丁が多いたためでもある。落丁のない18式年（1711年、1720年、1750年、及び1786年以降の式年）に限れば、桐華・把溪・龍淵・湧泉・雲興・南地藏・北地藏の7寺が継続して記載されている。

16世紀前半の編纂である『新增東国輿地勝覧』大丘都護府・仏宇条には桐華寺・地藏寺・仙槎菴・夫人寺・慈華寺・把溪寺・菩提寺の7寺庵がみえる。地

(6) 尹用出『朝鮮後期の 徭役制의 雇傭労働』（ソウル大学校出版部、1998年）164ページ、および山内民博前掲「朝鮮戸籍大帳の寺・僧把握」1ページ。朝鮮前期の僧の録籍については押川信久「朝鮮王朝建国当初における僧徒の動員と統制」（『朝鮮学報』185、2002年）、同「『経国大典』度牒発給規定の成立」（『年報朝鮮学』9、2006年）に述べられている。

(7) この24冊の大丘府戸籍大帳の奎章閣番号はつぎのとおりである。1681年：奎14810、1702年：奎14658、1705年：奎14666、1711年：奎14660、1720年：奎14605、1723年：奎14802、1738年：奎14616、1750年：奎14680、1777年：奎14657、1786年：奎14689、1789年：奎14705、1795年：奎14693、1801年：奎14681、1804年：奎14708、1810年：奎14662、1816年：奎14676、1825年：奎14733、1834年：奎14727、1837年：奎14725、1858年：奎14789、1861年：奎14785、1867年：奎14783、1870年：奎14762、1876年：奎14761。

表1 大丘府戸籍大帳僧戸秩の寺庵別戸数

式年	桐 華 寺	把 溪 寺	夫 仁 寺	龍 湊 寺	湧 泉 寺	雲 興 寺	南 地 蔵 寺	北 地 蔵 寺	大 悲 寺	林 水 寺	社 禪 壇	臨 休 寺	そ の 他 寺 庵	計
1681*	62	△	△										27	—
1702*	42	15	37	84	78	26	29	23	2	16			26	—
1705*	43	25	48	85	87	26	32	28	4	17			34	—
1711	39	28	29	80	84	21	32	23	5	15			48	404
1720	31	37	35	94	89	19	38	29	5	15			49	441
1723*	28	41	36	97	86	20	24	31	5	15			50	—
1738*	54	34	34	83	89	21	△	24	5					—
1750	53	34	24	86	90	23	17	26	5	3	8		4	373
1777*			13	46	57					3				—
1786	52	21	13	39	85	19	9	12	3		4	3		260
1789	53	21	13	40	85	20	9	12	3		4	3		263
1795	52	21	14	39	85	20	9	12	3		3	6		264
1801	53	21	4	39	55	21	9	10			3	6		221
1804	52	9	4	39	53	20	12	9			3	6		207
1810	53	22		37	55	19	9	8			3	6		212
1816	54	22		29	55	20	9	6			3	6		204
1825	57	22		40	55	15	9	9			3	6		216
1834	53	23		39	55	15	9	9			3	6		212
1837	52	23		38	55	15	9	9			3	6		210
1858	63	36		80	54	24	9	20			2	6		294
1861	59	35		53	58	24	22	19			2	10		282
1867	83	63		73	80	21	7	23			2	13		365
1870	83	63		73	41	21	8	23			2	13		327
1876	83	63		72	1	22	8	13			1	4		267

*をつけた式年は落丁があり、僧戸全体を把握できない。

空欄はその寺庵の記載がないことを示す。

△はその寺庵の戸数の一部しか把握できないことを示す。

蔵寺は表1 南地蔵寺のことで、夫人寺は夫仁寺にあたる。桐華寺・把溪寺とあわせ僧戸秩のうち4寺は『新增東国輿地勝覧』にも確認できるわけである。18世紀中葉の編である『輿地図書』大丘都護府・寺利条では『新增東国輿地勝覧』所収の寺庵に新增して雲興寺・龍湊寺・湧泉寺の3寺がくわえられている。⁽⁸⁾ 1832年頃の編纂である「大丘府邑誌」(『慶尚道邑誌』所収)まで下ると、1711

(8) 奎章閣所蔵20冊本、奎666。影印：『邑誌一慶尚道①』(亜細亜文化社、1982年)。

年以降の完冊に継続して記載されている桐華寺・把溪寺・龍淵寺・雲興寺・南地蔵寺・北地蔵寺・湧泉寺の7寺すべての存在を確認できる(仏字条)。また、夫人寺について「大丘府邑誌」仏字条は「今革為庵、属庵下仙庵、并属桐華寺」と、桐華寺の属庵となったことを伝えている。1810年以降の僧戸秩に夫仁寺の記載がない理由であろう。⁽⁹⁾

表1でやや異色なのが社禪壇である。式年によって社禪寺・社禪祠とも記されている。もちろん本来社禪は寺庵ではないのであるが、大丘の場合、つぎのとおり社禪壇に斎舎を設け、僧に守護させていた。

社禪壇、在府西七里坪山。設斎舎、使僧守護。神室壬子創建。

(前掲「大丘府邑誌」壇廟条)

そのため、1750年以降の各式年で社禪壇に僧戸が記載されているのであろう。

表1戸数計欄を、1711年以降の総戸数の把握が可能な式年について通覧すれば、1711年には400戸を越え、1720年には最多の441戸を記録する。18世紀後半から減少傾向に転じ、19世紀前半にかけて200戸を若干越える水準で推移する。19世紀後半にはふたたび増加し300戸を超過した後、最後の1876年には267戸と減少している。さきにみたように原則としては一人の僧がその上佐とともに一戸として記載されているので、この戸数の推移は戸籍大帳上で把握された僧数のおよその変化を示していることになる。⁽¹⁰⁾

寺庵を個別にみると、桐華・把溪・龍淵・湧泉の4寺の規模がほぼ一貫して大きい。この4寺で常に50%以上、18世紀後半以降に限れば70%以上の戸数を占める。把溪・龍淵両寺は18世紀後半に、湧泉寺は19世紀に入って戸数を減らした後、4寺とも19世紀後半には反転して増大しており、おおむね全体僧戸数の推移と併行する。また、1876年に全体の戸数が減少している主因も湧泉寺戸数の激減に求められよう。

もっとも戸籍大帳に記載された僧戸の数が実際に各寺庵に住んだ僧の実数を反映したものとは限らない。表1でもたとえば桐華寺の戸数は1750年から1837

(9) 『新增東国輿地勝覧』に名がみえて、僧戸秩にはない仙槎菴・慈華寺・菩提寺について、前掲「大丘府邑誌」はいずれも「古有今無」と記している。おそらく18世紀には廃寺となっていたのであろう。

(10) 後論するように僧戸秩には僧ではない者が戸主になっている例も若干ある。

年まではほとんど52戸ないし53戸であり、1867年からの3式年は83戸がつづく。ほかの寺庵でも18世紀後半以降、一定期間戸数が変わらない時期がしばしばみられる。このことは各寺庵ごとに一定期間、戸籍大帳上の戸数が意図的に固定されていた、いいかえれば各寺庵の僧戸数が定められていた可能性も示唆している⁽¹¹⁾。

それでは、僧戸の具体相を検討するため、僧戸秩の各寺庵のうち、大寺の例として桐華寺を、中小規模の寺刹として南地藏寺を選んで子細にみていくことにしよう。

(2) 桐華寺の僧戸記事

桐華寺は府の北部、八公山に位置する。新羅時期から存在を確認でき、前述のとおり『新增東国輿地勝覧』にも記載がある。⁽¹²⁾「嶠南（慶尚道）七十州之首刹」とも称した大丘を代表する寺刹であり、植民地期には30本山（31本山）の一つとされた。

桐華寺の僧戸数は1681年に62戸を記録した後、17世紀前半には30～50戸程度、17世紀後半から19世紀前半にかけては52～53戸程度で推移し、19世紀後半に増加して最後の3式年は83戸に達している。僧戸秩に桐華寺が載る23式年のうちからここでは1681年（肅宗7年辛酉式）、1711年（肅宗37年辛卯式）、1750年（英祖26年庚午式）、1786年（正祖10年丙午式）、1801年（純祖元年辛酉式）、1825年（純祖25年乙酉式）、1858年（哲宗9年戊午式）、1876年（高宗13年丙子式）の8式年をとりあげて検討の対象としたい。

以上の8式年の桐華寺に記載された僧・上佐などの数を整理すると表2となる。上欄「戸主」は戸の筆頭者であり、「上佐」・「率」・「師兄弟」は戸主との関係を示す。上佐は前述のとおり弟子のことであり、1825年と1858年にのみ登

(11) 一般民戸の場合、各里ごとにあらかじめ戸籍大帳に登録すべき戸数を配定する手法がとられることがあった。一般戸籍の編成方法については山内弘一「李朝後期の戸籍編成について―特に地方の場合を中心に」(武田幸男編『朝鮮後期の慶尚道丹城県における社会動態の研究(Ⅱ)―学習院大学蔵朝鮮戸籍大帳の基礎的研究(3)』学習院大学東洋文化研究所、1997年)を参照されたい。

(12) 「桐華寺壬子甲禊序」(『混元集』巻一)につぎのようにある。「歳戊寅姑洗之月上巳之翌日、前僧統明公進言曰、桐華即嶠南七十州之首刹也」。ここにいう戊寅年は高宗15年(1878年)にあたる。

表2 桐華寺戸口の内訳

式年	身 分 職 役	戸 主	上 佐	率	師兄弟	計
1681	良僧	52	2		1	55
	駅僧	1				1
	良	1	52			53
	掌隷院寺奴	3	1			4
	奉常寺奴	1	1			2
	寺奴	1				1
	私奴	3	1			4
	不記		4			4
	計	62	61	0	1	124
1711	良僧前摠撰嘉善大夫	1				1
	良僧通政大夫	5				5
	良僧前僧将	1				1
	良僧	21				21
	寺奴僧	3				3
	私奴僧	1				1
	僧		2			2
	不記		22		4	26
	(破損) 計	7	1			8
	計	39	25	0	4	68
1750	良僧嘉善嶺南摠撰兼僧大将	1				1
	良僧通政三南摠撰	1				1
	良僧通政	7				7
	良僧前僧将	1				1
	良僧	43				43
	不記		53		7	60
	計	53	53	0	7	113
1786	僧嘉善	1				1
	僧通政	5				5
	僧三南摠撰	1				1
	僧嶺南都摠撰	1				1
	僧前嶺南摠撰	1				1
	僧前摠撰	2				2
	僧前僧将	2				2
	僧	39				39
	刻手		1			1
	不記		53		3	56
	計	52	54	0	3	109
1801	僧嘉善	3				3
	僧通政	3				3
	僧摠撰	1				1
	僧僧将	1				1
	僧	44				44
	僧刻手	1				1
	刻手		1			1
	巡刻手		1			1
	不記		59			59
	計	53	61	0	0	114
1825	良僧通政	1				1
	良僧前僧統	3				3
	良僧前摠撰	8				8
	良僧	44				44
	僧	1		7		8
	巡刻手		2			2
	不記		49		1	50
	計	57	51	7	1	116
1858	僧前僧統	1				1
	僧	62		42		104
	計	63	0	42	0	105
1876	僧	82				82
	良僧	1				1
	不記		34			34
	計	83	34	0	0	117

* 師兄弟には師兄・師弟・率弟・弟・孫弟を含む

場する「率」は実際の僧戸秩表記上はみな「率僧」としてあらわれる。1858年に上佐の記載がないことからみて、上佐と率僧は同義で用いられているようである。「師兄弟」は具体的には師兄・師弟などと表記された者で、戸主と師が共通の兄弟弟子なのであろう。各式年、師兄弟はわずかで、記載者の大半は戸主か上佐・率僧である。戸主と上佐・率（僧）はおおよそ同数程度といつてよからう。

左欄「身分職役」として示したのは、各人の名の前に記載された「良僧」・「駅僧」といった記述である。「良」・「良僧」や「寺奴」・「私奴僧」といった身分を示すもの、「通政大夫」や「捻撰」など官階や僧職をあらわすもの、あるいは「刻手」といった役を示しているものなどみられる。この身分職役記述の特徴とその変化を、各人の記載書式とあわせて、以下、詳しくみてみよう。

1681年僧戸の概要

1681年（肅宗7年辛酉式）の桐華寺の戸数は62で、同数の戸主のほか、61名の上佐、1名の師兄弟（率弟）がいた。戸主のうち52名は、前掲した「良僧智仁」のように、僧名の前に「良僧」と記されている。残る戸主のうち1名は「駅僧」、1名は「良」とのみあり、残る8名は「寺奴」ないし「私奴」である。

まず、駅僧はつぎの例である。

新戸駅僧卓軒、年参拾壹辛卯、本大丘、父寺奴貴良、母駅吏女□□、率弟良僧法宗、年拾玖癸卯（□は判読できない文字。以下、同じ。）

新戸とあるのはこの式年で新たに戸として登載されたことを示す。父が寺奴、母が駅吏女であり、母方の身分職役を継いで「駅僧」と記されているようである。駅吏は世襲の役で、一般に良身分のなかでも下位に置かれた。ただし、このほかに父が駅吏、母が駅女である戸主が良僧と記されている事例が1件あり、駅吏層出身者が必ず「駅僧」と記載されるわけではなかった。良身分でありながら、特定の役を世襲した駅吏層の中間的性格を示していよう。

奴戸の例を寺奴と私奴それぞれあげてみよう。

戸掌隸院寺奴冲輝、年肆拾貳庚辰、本大丘、父寺奴貴生、母寺婢□□、率上佐石欽、年貳拾柒己未

戸私奴善元、年肆拾壬午、本大丘、主忠州趙光輝、父正兵千信之、母私婢甲寅、率上佐良法天、年貳拾肆戊戌

「掌隸院寺奴」とは掌隸院に属する寺奴であることを示す。寺奴とは官庁所

属奴・公奴のことで、仏寺とは関係しない。この「寺奴冲輝」の父母も寺奴婢である。「私奴善元」は「主忠州趙光輝」とあって、忠州の趙光輝を主人（上典）とする私奴（個人に隷属する奴）である。父は良身分の正兵であるが、母が私婢であるため私奴なのであろう。これだけならば通例の寺奴・私奴なのであるが、寺奴冲輝・私奴善元いずれも戸内には上佐が記載されている。ほかの6名の奴である戸主も1名をのぞいてはやはり上佐が戸内に載せられている。ほとんどの奴戸主が上佐をもつこと、そしてつぎの1711年の僧戸秩では戸主として「寺奴僧」・「私奴僧」が登場することから考えれば、1681年の「寺奴」・「私奴」は単なる奴ではなく、奴である僧とみてよからう。

残る「良」とのみ名の前に記す戸主1名にも上佐がいて、これは「良僧」と書くべきところ「僧」字が落ちたものと思われる。「良僧」・「良」という表記は明らかに奴である僧と対比されており、良身分である僧を意味する。

このように1681年桐華寺僧戸の戸主はみな僧であると判断される。ただし、記載にあたっては良賤身分制が影響し、良身分であれば「良僧」と、賤身分（奴婢）であれば「寺奴」・「私奴」などと記載した。また、良身分のなかでもやや特殊な世襲集団である駅吏層の出身者は「駅僧」と記されることもあったのである。このことは奴婢身分の者が僧となりえたことを示すと同時に、戸籍の上では僧も国家的な良賤身分制の枠内に位置づけられていたことを意味する。

良賤身分を明示するという方針は上佐に対してもほぼ貫徹されている。表2のとおり、61名の上佐のうち名のみを記す例は4名のみで、54名は「良僧」ないし「良」とあり、3名は「寺奴」・「私奴」である。率弟の1名も「良僧」である。また、上掲「私奴善元」戸のように、上佐のいる7名の奴戸主のうち5名は上佐が「良」である。戸主（師僧）が賤身分で上佐が良身分ということも珍しくなかったようである。

以上のとおり、僧の戸籍大帳への記載にあたっては、各人の身分的出自を明示しつつ、一人の僧を1戸として把握し、その僧の上佐等を戸内に登載するという形がとられたのである。戸主の数と上佐・師兄弟の合計数は同じであるが、上佐・師兄弟の記載された戸は46戸で、16戸は戸主のみである。戸内上佐・師兄弟の数は3名がもっとも多く、これが2戸。2名の戸が12戸、1名のみが32戸である。

こうした僧戸記載のありかたを一般の戸口とくらべるとどのような特徴があ

るのであろうか。つぎに示したのは、同じ1681年大丘の通常の戸2例である。

第一戸私奴長命、年肆拾壹辛巳、本密陽、主全羅道李世俊不諭府居金敬信、
父私奴乱守、母私婢立春、祖莫乃、曾祖莫金、外祖宋允卜、本潭陽
妻私婢自隱春、年參拾柒乙酉、本密陽、主清道崔之君、父正兵朴日正、
母私婢得每、祖正兵春上、曾祖正兵連支、外祖私奴岩外、本密陽
率女從分、年拾伍丁未、次子從日年拾參己酉、次女從德、年壹辛酉、今
加現、戊午戸口相准（守南面牛勒里第一統）

第三戸京別隊金乱生、年肆拾貳庚辰、本金海、父日金、祖注叱同、曾祖正
兵注叱石、外祖正兵李之發、本慶州
妻良女襄召史、年肆拾參己卯、本大丘、父忠男、祖中化、曾祖西羽、外
祖正兵劉銀夫、本大丘
率子京別隊保承業、年拾捌甲辰、次女召史年玖癸丑、子斗岩、年壹辛酉、
今加現、戊午戸口相准（守南面牛勒里第一統）

冒頭に第一戸、第三戸とあるのは、作統された戸番号を示す。この式年の僧
戸秩以外の戸は、5戸ごとに統にまとめられ、各戸第一戸から第五戸まで戸番
がふられる。統は里ごとに第一統から順に番号がつけられており、上掲2戸は
守南面牛勒里の第一統に属する。すなわち、大丘府内の一般の戸は、面一里一
統一戸という形で編成されていたのである。それに対し、僧戸秩の各戸は作統
されておらず、通常的面里統戸編成の外に置かれていたことになる。この点は
19世紀後半まで一貫している。

第一戸私奴長命戸は奴婢戸の例で、戸主が私奴、妻も私婢で、くわえて3人
の子女が載せられている。戸主である私奴長命は、名・年齢・生年干支・本貫
の後に主（上典）及び父・母・祖・曾祖・外祖の情報が記載される。妻私婢自
隱春の記載内容も同様である。

第三戸京別隊金乱生は京別隊の役を負う良身分男性で、姓名・年齢・生年干
支・本貫につづいて父・祖・曾祖・外祖の四祖情報が記され、母の記述はな
い。これはやはり良身分の女性である妻良女襄召史も同じである。

すなわち、良身分戸主と賤身分戸主とは区別されており、姓の有無と母記載
の有無において違いがあったのである。⁽¹³⁾奴婢の母を記載するのは、奴婢の身分・
所属が原則として母役にしたがったからで、身分・所属を明確にする上で必須
の事項であった。⁽¹⁴⁾それ以外の点は、良賤でおよそ共通し、戸主と妻の年齢・本

貫・四祖についてはいずれも記されている。

一方、僧戸の場合、良僧も奴僧も祖先情報は父と母を記載して、祖以上は載せていない。良か奴かを明示しつつも、その記載書式においては一般戸口と異なり、良賤にかかわらず父母のみを記す僧独特の形式であったのである。

1711年僧戸の概要

1711年(肅宗37年辛卯式)になると、1681年にくらべ戸数が減少するほかに、つぎの3点を特徴としてあげることができる。

第一に表2に示したとおり「寺奴僧」・「私奴僧」と、奴戸主が僧であることが明示されるようになった。いいかえれば、この時点でも僧は良賤身分制の中にあり、良僧か奴僧かが区別されているのである。ただし、上佐についてはほとんど名を記すのみで、良賤の別は記載されなくなっている。

第二に、良僧の中に「前掄撰嘉善大夫」・「通政大夫」・「前僧将」といった僧職・官階をもつ者があらわれている。まず、嘉善大夫は従二品、通政大夫は正三品堂上のいずれも東班(文官)の堂上官である。掄撰(掄撰・総撰)は壬辰丁酉乱の時に僧軍を主管するため置かれた僧将の称で、はじめ休静が八道都総撰に任じられ、また各道に総撰が置かれた。⁽¹³⁾その後、南北漢山城をはじめ僧が築城守備したいくつかの山城に総撰が置かれ、南北漢山城の総撰(僧大将)は八道都総撰を兼ねた。さらには王室と関係の深い寺や史庫守護寺など主要な寺刹の住持も総撰に任じられるようになり、19世紀中葉、綏陵(翼宗陵)の「香

(13) まれに奴であっても姓が記載されている例がないではなく、女性であれば良身分であってもしばしば称姓していない。したがって、厳密には称姓の有無が良賤を分けるわけではないが、男性戸主についていうと姓の有無はおおよそ良賤身分に対応する傾向がある。なお、吉田光男「朝鮮の身分と社会集団」(『岩波講座世界歴史13』岩波書店、1998年、231～232ページ)が慶尚道丹城県における称姓と身分との関係の歴史的推移についてふれている。

(14) この時期は奴と良身分女性との間に生まれた子女(奴良妻所生)の身分をめぐる法制が頻繁に変化していた(平木實『朝鮮社会文化史研究』国書刊行会、1987年、177～201ページ)。それは措いても、母が婢の場合、あるいは両親がそれぞれ主人を異にする奴婢の場合には所生は奴婢として母の主人に属する(従母役)のが原則で、その意味で奴婢の母に関する情報は重要であった。

(15) 総撰については高橋享『李朝仏教』(宝文閣、1929年。復刻、国書刊行会、1973年)534～547ページ、995～1003ページ、呂恩暉「朝鮮後期山城의 僧軍總撰」(『大丘史学』28、1987年)、李逢春「朝鮮仏教의 都總撰制度의 그 性格」(泗溟堂記念事業会編『泗溟堂惟政』知識産業社、2000年)などに詳しい。

炭造泡之寺」とされた桐華寺にも「綏陵香炭封山守護摠撰兼桐華寺僧風糾正僧統」が置かれたという⁽¹⁶⁾。ただし、本戸籍大帳から18世紀前半には桐華寺に総撰の存在を確認でき、何らか王室・国家との関係から総撰職を得ていたのであろう。

大丘府戸籍大帳僧戸秩では桐華寺のほかにも把溪寺、龍湫寺、湧泉寺、北地藏寺に総撰を確認できる。このうち英祖の御筆御押を奉安した把溪寺には「御室守護摠撰兼把溪寺僧統」がいて、総撰は宗親府から任命された⁽¹⁷⁾。把溪寺に関するつぎの宗親府の完文からは王室と関係を結ぶ目的の一つが地方官による過重な僧役負担を回避するためであったことを予想させる。

辛亥五月日

宗親府爲完文成給事、慶尚道大邱八公山把溪寺、即英廟朝御筆御押奉安之所、則与尋常寺觀有異也。……挽近以来營本府雜役及下屬輩誅掠侵漁之弊、有不可勝言。……

一、僧徒之刷還与僧番之弊、各別嚴禁、昭載御押完文中是如、多有不遵之弊云、此後則各山城与營本府刷還番錢、一切嚴禁爲齊。

……

一、運役之弊自是殘僧難支之狀至、於本寺則御押完文中且有勿侵之教、營本府運役及各寺助役等節、一切嚴禁爲齊。

（『宗親府節目』所收「辛亥五月日宗親府完文」）⁽¹⁸⁾

宗親府が完文を成給するに、慶尚道大邱八公山把溪寺は英廟朝御筆御押奉安の所で尋常の寺とは異なっている。……近ごろ營・本府の雜役及び下屬輩の誅求侵害の弊が言うにたえなくなっている。……

(16) 高橋享前掲『李朝仏教』1001～1002ページ、『日省録』憲宗13年6月29日丙子、憲宗13年7月19日丙申、高宗17年10月10日乙巳。

(17) 光緒七年（1881年）の「御室守護摠撰兼把溪寺僧統」からの牒報が残り（『古文書二』ソウル大学校図書館、1987年、牒呈八二）、『宗親府節目』（『古文書13』ソウル大学校奎章閣、1996年、節目二）に載る「辛亥五月日宗親府完文」に「一、本寺乃是御筆御押奉安寺、則守護摠撰・山都監・都書記差帖段、自本府成給以送爲齊」とある。また、前掲「大丘府邑誌」仏字条には「把溪寺……願堂屬於義宮、御筆閣肅廟英廟正廟三朝御筆奉安」とあって、同寺に於義宮の願堂があるとともに、肅宗・英祖・正祖三朝の御筆を奉安する御筆閣があったとも伝えている。

(18) 前掲『宗親府節目』。辛亥年は正祖15年（1791年）ないし哲宗2年（1851年）である。

一、僧徒の刷還と僧番の弊を各別厳禁することについて御押完文中に載せられているが、多く不遵の弊があるという。今後は各山城と營・本府の刷還番錢を一切厳禁すべし。

.....

一、運役の弊により残僧難支の状態に至っている。本寺については御押完文中に運役を課してはならないとの教があるので、營・本府運役及び各寺助役等は一切厳禁すべし。

ところで、1711年桐華寺の「前掾撰嘉善大夫」1名は名まで記せば「良僧前掾撰嘉善大夫善元」である。実はこの善元は1681年の私奴僧の例としてあげた「私奴善元」と同じ人物である。生年干支・父母名が一致し、1681年の戸内にいた上佐「法天」は30年後にも上佐として記載されている。この間に善元は私奴から免賤され良僧となり、総撰職を経験して嘉善大夫にまでのぼったわけである。1720年の僧戸秩龍渚寺に「前三南掾撰兼僧将賞嘉善恵照」とあるのをみれば、善元の嘉善大夫の官階も賞職、贈職であったのであろう。

僧将の職は義僧役に関連するものであろうか。この時期、南北漢山城の守備に各地の僧が動員されていた。北漢山城所属の三南（忠清・全羅・慶尚三道）各寺について、つぎのような記録がある。

（藥房副提調趙）顕命曰……北漢所属三南各寺、有住持僧将等所任、僧徒拳皆艶慕、而本道監兵使及守令、各以其所親之僧差送。（『承政院日記』英祖5年10月26日丁卯、1729年）

（藥房副提調趙）顕命がいうには、……北漢（山城）所属の三南の各寺には住持僧将等の所任があり、僧徒は挙げて皆（この所任を）艶慕しておりますが、各道の監兵使及び守令はおのおの親しい僧をこれらに任命しております。

北漢山城に属して義僧（僧兵）を送る三南各寺には住持僧将などの所任があり、それは道の監司（觀察使）・兵使や郡県守令が任命しているというのである。⁽²⁰⁾大丘の各寺は南漢山城に属していたが、事情はおそらく同様であったと思⁽²¹⁾

(19) 1681年の善元の「母私婢甲寅」は1711年では「母良女甲寅」として記載されている。

(20) 趙顕命はこれにつづいて各寺僧任を北漢総撰の部下の将に換えるべきことを主張している（「此後則以北漢總撰部下將換僧人等、依軍門久勤例、計仕差送、以為激勵之地、而分付各道、更勿以私僧差出事、嚴飭何如」）。

(21) 『備辺司謄録』英祖32年（1756年）正月12日「南北漢義僧防番錢磨鍊別單」。

われる。

1681年とくらべての第三の変化は、各戸主僧に「師」僧が記されるようになった点である。前述した善元の戸をあらためてかけてみよう。

戸良僧前捻撰嘉善大夫善元、年柒拾壬午、本大丘、父保人千信知、母良女
甲寅、師處允、率上佐法天、年伍拾肆戊戌、率上佐文哲、年參拾伍丁巳
等、戊子戸口相准

おおむね1681年と書式は共通するが、新たに「師處允」と善元の師僧名が記載されている。⁽²²⁾僧戸ではない戸口には当然存在しない記載内容であり、四祖ではなく父母を載せる祖先記載とあわせ、一般戸口との違いがより明瞭となっている。この式年の桐華寺39戸中、37戸に「師」が記されている。

18世紀後半以降の僧戸の概要

1750年（英祖26年庚午式）以降の変化としては、まず良賤身分制的な記述が縮小・消滅していく傾向をあげることができる。

1750年には戸主のすべてが「良僧」となり、奴僧は記されていない。あくまで良であることを明示し続けて、形式の上では良賤身分制が残ってはいるものの、僧戸内部の身分的差異はなくなっていた。さらに、1786年（正祖10年丙午式）以降になると、形式上も良賤制的な記述が消えていく。表2のとおり、1786年以降では1825年を例外として戸主はほとんど「僧」であり、良賤の別は記されていないのである。

表3 桐華寺僧戸戸主の母・外祖記載

式年	母	外祖	不記	計
1681	62			62
1711	39			39
1750	18	26	9	53
1786	14		38	52
1801			53	53
1825			57	57
1858			63	63
1876			83	83

（数値は戸主口数）

また、祖先記載にも変化がみられる。表3は桐華寺の僧戸戸主の母方祖先情報の記載についてまとめたものである。父についてはすべての式年で全員記載されているが、母方については時期により違いがある。1711年まではすべての戸主について母の情報が記載されていたが、1750年になると、53名の戸主のうち母を記載するのは18名に

(22) 細かくいえば、末尾に「戊子戸口相准」と前式年との検証結果が記されるようになっていいる。これは一般戸口と共通する記載項目である。

とどまり、26名は母ではなく外祖が載せられている。また、残る9名は母も外祖もなく、祖先については父を記すだけである。1786年では母方不記載の例が増加し、さらに19世紀になるとすべて母も外祖も載せずに父のみを記載するようになっていく。

すなわち、19世紀には僧(・僧職等)・名・年齢・生年干支・本貫・父情報・師名というのが僧戸主の基本書式であり、良僧・奴僧の違いなど、身分制ないし個々の僧による相違は消滅し、僧として共通する形をとるようになった。1681年の僧戸にしても、その書式は一般民戸と異なっていたが、19世紀になると母方情報をまったく記載なくなり、母方外祖を含む四祖を記載する一般民戸との相違はより明確になったのである。

表2にもどって身分職役記載を一覧すれば、1750年以降には「嶺南(都)摠撰」・「三南摠撰」・「僧統」といった僧職が新たに登場している。「嶺南摠撰」・「三南摠撰」は嶺南(慶尚道)、三南(忠清・全羅・慶尚三道)と広範囲を対象とした総撰職で、単なる総撰よりもその格は上であろう。ただし、桐華寺に「嶺南摠撰」がいる同じ1750年の龍淵寺にも前職でない「嶺南摠撰」が記載されており、その職任は必ずしも独占的な地位ではなかったようである。したがって嶺南総撰や三南総撰に実質的な権限がともなったのかは疑わしい。「僧統」の称は朝鮮以前からあるが、朝鮮後期には慶尚道密陽の西山大師(休静)・松雲大師(惟政)を祀った表忠祠に都総撰とともに都僧統が置かれるなど、大寺に僧統がいた。⁽²³⁾ 桐華寺では1804年(純祖4年甲子式)が初出である。また、19世紀後半から19世紀前半にかけて「刻手」・「巡刻手(巡営属刻手)」といった役を負う僧・上佐もみえる。板刻技術をもつ寺刹・僧が地方官衙に動員されたことを示している。

なお、最後の1876年には総撰・僧統などの僧職記載者がいない。同式年ほかの寺庵にも僧職を記した僧はいない。一方で、先にみたように文書史料から1881年の把溪寺に「御室守護摠撰兼把溪寺僧統」がいたことは確認できる。⁽²⁴⁾ 19世紀後半、僧職を載せない傾向が生じていたようであり、戸籍大帳上ではほぼ一律にただ「僧」として記載されたのである。

(23) 高橋亨前掲『李朝仏教』998～1002ページ。

桐華寺僧の年齢と出自

ここまでみた1681年から1876年までの8式年に記載された桐華寺の戸主僧と上佐（率僧）の年齢を整理してみると表4となる。戸主である僧はおおむね平均年齢が40歳代から50歳代で、20歳代から戸主僧となっている者もある。上佐（率僧）の平均年齢はおよそ20歳代から30歳代で、年齢は10歳代から50歳代まで分布している。19世紀後半には戸主・上佐ともに平均年齢が増加し、1876年戸主の最高齢は100歳とやや疑わしい。実は1876年の83名の戸主のうち、5名には生年干支が記載されず、また1870年の僧戸秩と同一の人物が生年干支は異なっている例もみられる。1867年、1870年、1876年の桐華寺僧戸数が83戸と一定していることを含め、最末期の僧戸秩記載には不審な点が少なくない。とくにこの時期については記載内容を実態とみることは慎重であるべきであろう。

上佐は師僧のもとで修行を積み、やがて僧として自立したようである。⁽²⁵⁾ 1750年桐華寺に「戸良僧通政守寛放代順行……師守寛故」という僧戸記事があるが、これは良僧通政守寛の死没にともない上佐の順行がかわって戸主僧となったと

表4 桐華寺戸主・上佐（率僧）の年齢

式年	戸 主			上佐（率僧）		
	平 均	最年長	最年少	平 均	最年長	最年少
1681	43.6	72	23	25.2	39	15
1711	52.8	77	27	35.0	59	20
1750	47.1	78	26	29.0	50	13
1786	51.0	87	21	25.3	46	13
1801	51.5	80	27	25.2	56	16
1825	44.9	66	21	22.8	41	13
1858	53.0	82	34	37.2	51	22
1876	61.3	100	38	43.2	59	24

(24) 桐華寺の場合、1867年まで僧職の記載があるが、1870年と1876年の両式年では小さい僧職が消えている。これが記載原則の変更によるものであることは、1858年及び1867年に「前僧統」であった僧が1870年にはただ名のみを記している例があることから確認できる。

(25) 高橋亨前掲『李朝仏教』907～910ページ。

いうことであろう。また、同式年湧泉寺にはつぎのような例もある。

戸僧通政会初年陸拾壹庚子……率上
佐等守各戸

この場合は僧通政会初の上佐であった等守が「各戸」、すなわち戸主となったことを示しており、実際、湧泉寺内には「戸僧等守、年参拾参戌戌……師僧通政会初」と、僧等守が戸主として記載されている。

戸主について父の情報が必ず記されている点についてはすでに述べた。表5は桐華寺僧戸主の父の身分職役を1681年から1876年までの8式年について整理したものである。

まず、1681年では嘉善・通政といった官階をもつ者から、正兵・保人、匠人、寺奴・私奴まで多様な階層から僧となっていたことがわかる。数の上では正兵・保人といった良役負担層が多い。1711年もほぼ同じ傾向であるが、1750年になると不記載者が増え、記載されているのは官階・官職保持者や学生・幼学など身分的・社会的な上位層が大半を占めるようになっていく。1786年で記載のあるのは通政・訓練判官が各1例のみであり、ほとんどは父の身分職役を記さない。この傾向は19世紀により明確となり、19世紀の4式年ではいっさい身分職役を載せず、ただ父の姓名のみを記している。

一般に19世紀にはしだいに非幼学層で

表5 桐華寺僧戸主父の身分職役

式年	身分職役	口数
1681	嘉善	1
	通政	5
	訓練奉事	1
	奉事	1
	定虜衛	2
	駅吏	1
	武学	1
	正兵	23
	軍士	1
	保人	10
	良人／良	5
	匠人	2
	寺奴	3
	私奴	2
	不記	4
計		62
1711	嘉善	1
	通政	1
	兼司僕	1
	業武	1
	武学	3
	正兵	17
	禁保	1
	保人	5
	良人	6
	寺奴	1
	不記	2
計		39
1750	嘉善	2
	通政	3
	折衝將軍	3
	宣務郎長水察訪	1
	学生	3
	幼学	1
	業武	2
	正兵	5
	不記	33
計		53
1786	通政	1
	訓練判官	1
	不記	50
計		52
1801	不記	53
1825	不記	57
1858	不記	63
1876	不記	83

は祖先の身分職役を記さないようになる傾向がみられるものの、たとえば1840年（憲宗6年庚子式）の大丘西上面南門外（里）の場合、85戸中72戸の戸主は父の身分職役を載せている。同里の幼学戸は6戸で、大半は良役負担戸が占めている。僧戸戸主の良賤記載がなくなるとともに、僧の身分的出自を示さなくなっていたのであり、一般民戸と僧戸との差異がここにもみられるのである。

(3) 南地蔵寺の僧戸記事

つぎに桐華寺よりも小規模な寺刹として南地蔵寺を取りあげてみよう。南地蔵寺は府の南、最頂山にあり、『新增東国輿地勝覧』には単に地蔵寺とある。

後、府北八公山の北地蔵寺と区別して南地蔵寺と称された。19世紀には南地蔵菴ないし単に南地蔵と記載されている式年もある。

表1のとおり1681年には落丁のためか南地蔵寺はなく、18世紀前半は30戸前後、以後減少して19世紀はほとんどの式年で10戸を下回っている。1711年以降の桐華寺と同じ式年を選んで、南地蔵寺僧戸記載者を整理したものが表6である。桐華寺と比較しつつ、その特徴をみていこう。

第一に、戸主僧の良賤表記についていえば、1711年の南地蔵寺

表6 南地蔵寺戸口の内訳

式年	身分職役	戸主	上佐	率	(外居)	計
1711	通政	3				3
	良僧	14	23			37
	奴病人僧	1				1
	僧		2			2
	師病人			1		1
	奴病人			1		1
	奴			1	1	2
	婢				1	1
	不記	1	1			2
	(破損)	13				13
	計	32	26	3	2	63
1750	僧	17				17
	不記		20			20
	計	17	20	0	0	37
1786	僧	9				9
	刻手		1			1
	不記		8			8
	計	9	9	0	0	18
1801	僧嘉善	1				1
	僧通政	1				1
	僧	7				7
	不記		17			17
	計	9	17	0	0	26
1825	良僧通政	2				2
	良僧	7				7
	不記		24			24
	計	9	24	0	0	33
1858	僧	9		17		26
	計	9	0	17	0	26
1876	僧	8				8
	計	8	0	0	0	8

は桐華寺と同じく良僧と奴僧を区別していた。1711年は破損のため各戸主の冒頭記述の不明な例が多いのであるが、14名の「良僧」と1名の「奴病人僧」を確認できる。「奴病人僧」は、その主（上典）が記載されており、私奴僧であったとみられる。「通政」2名には僧の表記はないが、師名を含む記載内容からみてこの二人も僧であることは間違いない。桐華寺では1750年まで「良僧」表記が続いていたが、南地藏寺では1750年から単に「僧」とのみ書くようになっている。18世紀中葉に僧の良賤区別がなくなりつつあったことを示している。1825年に一時的に「良僧」が復活しているのは桐華寺と同じである。

記載書式の変化もほぼ桐華寺に類似する。1711年の戸主であれば、桐華寺と同じく良僧某・奴僧某といった僧名の後に年齢・生年干支・本貫・父母情報・師名と続いている。南地藏寺では1786年まですべて父母双方を記載しているが、19世紀になるといっさい母を載せず、祖先情報が父のみになるのは桐華寺と共通する。また、やはり桐華寺と同じく父の身分職役を記載するのは1786年⁽²⁶⁾までで、19世紀になるとほぼ姓名を記すだけである。

表6で興味深いのは1711年にみられる戸主僧・上佐ではない奴婢の存在である。表6、1711年では戸主の奴僧を別として、奴病人1名、奴2名、婢1名が記載されている。このうち奴病人1名と奴のうち1名は、上佐とは記されていないものの、上佐良僧につづいて記載されており、上佐である奴とも考えられる⁽²⁷⁾。しかし、残る奴1名と婢1名はつぎのように明らかに上佐ではない。

戸良僧尚学、年伍拾壬寅……奴永先五所生婢守礼、年貳拾貳庚午、同婢一所生奴世礼、年貳庚寅、右二口時居甘勿川等、戊子戸口相准

婢守礼（奴永先の五所生）とその子奴世礼が良僧尚学戸に記載されているのであるが、この二人は「時居甘勿川」と甘勿川に住む外居奴婢であった。甘勿川はおそらく大丘の甘勿川面のことであろう。記載方式からすれば良僧尚学の所有奴婢であり、あるいは寺有の奴婢であったのかもしれない。

(26) ただし、最後の1876年の南地藏寺の記載は特異で、つぎのように僧名と年齢・生年干支しか全員載せていない。「僧近化、年陸拾陸庚午等、癸酉戸口相准印」。さらに、この式年では上佐も皆無である。この形は大丘府戸籍大帳僧戸秩のなかで1876年の南地藏寺だけにみられるもので、何らかの特殊な事情があったようである。

(27) 「戸良僧□敏、年柒拾柒乙亥……率上佐僧奎敏改名懷式、年貳拾伍丁未、奴病人正先、年貳拾捌甲子、奴英先、年拾貳庚辰等、戊子戸口相准」（1711年、僧戸秩南地藏寺）。

18世紀前半までは南地藏寺以外にも僧・上佐ではない者が僧戸秩に登場する例がある。次の表7は林水寺（臨水寺）の1720年（肅宗46年・景宗即位年庚子式）の戸口内訳である。

この式年の林水寺にはつぎのように「居士」が戸主としてその妻とともに記載されている。

戸居士金甫元、年柒拾壬辰、本金海、父正兵已永、祖正兵天乙、曾祖正兵貴上、外祖正兵白談沙里、本仁同

妻私婢承玉、年柒拾壬辰、本金海、主大丘居裴已每、父私奴世丁、祖私奴順元、曾祖私奴貴元、外祖正兵朴丕文、本漆谷、丁酉戸口相准印

居士とは「非僧非俗」の仏道修行者であり、上例のとおり妻帯することもある。この「居士金甫元」は姓をもち、その記載書式は一般良身分戸主と共通する。1720年林水寺の居士は4名。そのなかには「居士私奴代元」と私奴もいて、僧と同じく身分は良賤にわたっていた。表7の私婢3名はみな居士の妻であり、居士の率女（娘）が3名載せられている戸もある。寺内における居住形態はわからないが、この時期の僧戸秩寺庵には居士もいたわけである。大丘府僧戸秩の居士記載は1750年の夫仁寺が最後で、以後はみえない。1750年の林水寺には「上佐信輝為居士移居洞下」という記事があり、上佐が居士となって寺を出ている。18世紀中葉頃からは寺内戸口として居士を載せなくなっていたようである。⁽²⁹⁾

表7 1720年林水寺戸口の内訳

身分職役	戸主	上佐	妻	率女	計
良僧	6				6
僧	4				4
居士	3				3
居士私奴	1				1
私婢			3		3
不記		3		3	6
(破損)	1				1
計	15	3	3	3	24

(28) 「正言李羽晋啓言……我国所謂居士云者、非僧非俗。名漏編籍、身無役布、即流民之最殊常者」（『正祖実録』10年2月丙申、1786年）。16世紀初頭の実録にはつぎのように念仏者が居士を称していたとする記事がみえる。「引議景五倫輪対、啓曰……且念仏者、号称居士、男女群聚、或於寺刹、或於閭閻、黄巾素服、鳴錚擊鼓」（『中宗実録』4年3月癸丑、1509年）。居士については高橋享前掲『李朝仏教』（775～777ページ）にふれられている。

(29) なお、17世紀後半から寺外に記載されている居士もいた。たとえばさきに一般民戸の例として引いた1681年大丘府守南面牛勒里には「私奴居士丁每」がみえる（同里第四統第五戸）。

居士のほかには「馬房直」・「客室直」・「水碓直」といった寺内での雑務にあたったと推定される者が記載されている寺庵がいくつかみられる。こうした某直も1795年の湧泉寺を最後に僧戸秩からは消え、以後記される者はすべて僧・上佐（率僧）のみとなっている。

南地藏寺にもどって戸主僧の父の身分職役記載を検討してみると、1711年の戸主はすべて父の身分職役が記載されているが、1750年では17名中16名、1786年では9名中2名が父の身分職役を記していない。そして1801年以降になると戸主僧のすべてが父名のみを書いて身分職役を載せなくなる。おおよそ桐華寺と同じ傾向であるといえる。

父の身分職役記載をすべて記載していた1711年について述べれば、禦侮將軍2、宣力部直将1、忠壮衛・征虜衛・定虜衛といった諸衛が4、業武7、騎保1、正兵17という分布である。やはり、正兵など良役負担者を主としながらさまざまな階層から僧となっていたことを示していよう。⁽³⁰⁾

(4) 已上・都已上条の僧記載

僧戸秩は以上のような寺庵ごとの僧戸記載を基本としているが、式年によってはその末尾に「已上」として「僧元戸」と「僧口（人口）」が記載されることがある。つぎは1750年の僧戸秩末尾部分である。

已上

僧元戸参百柒拾参戸

僧口陸百柒拾伍口

実際にこの僧戸秩の各寺庵戸口数を集計してみると、373戸と700口となつて、戸数は一致し、口数は実際の集計値のほうが多いがまったく乖離しているというほどでもない。已上条の戸口数は僧戸秩の戸数と口数をまとめたものと考えられよう。僧戸秩已上条は上記1750年に初めてあらわれ、以後1834年までほぼ継続して記載されている。已上条記載の僧戸数は1750年以外の式年でも実際の集計値と一致ないし近似している。

戸口数をまとめた已上条は僧戸秩だけではなく、各面末尾にも置かれてい

(30) 前述のとおり1711年南地藏寺には奴僧もいたが、父は正兵で、母が私婢であつた。

(31) 1804年の僧戸秩の場合、「已上僧元戸・人口」という記述はあるが、戸口数は載せられていない。落丁のある1777年是有無を確認できない。

る。そして、それらの已上条を総合して、大丘府戸籍大帳の各式年末冊末尾、僧戸秩の後には「都已上」（式年によっては「已上」）条が置かれている。現存大丘府戸籍大帳のなかでもっとも古い都已上条は1711年のものであるが、破損が多く僧の記載も確認できない。つぎに古い1720年の都已上条をみると、まず冒頭部分では前式年と比較して邑の戸数・人口数をまとめている。

已上

丁酉元戸壹万参千貳百陸拾柒戸、内壹千陸百捌拾壹戸、以雑頭計除
時存壹万参千伍百捌拾陸戸、今加新戸壹千玖百参拾肆戸

合壹万参千伍百貳拾貳戸、作統貳千柒百肆戸（統）

丁酉元人口陸万伍千肆百伍拾壹口、内壹万貳千伍百貳拾口、以雑頭計除
時存伍万貳千玖百参拾壹口、今加現人口壹万肆千壹百柒拾肆口

合陸万捌千貳拾肆口

のように今式年の戸口数を13,522戸と68,024口とまとめた上で、つづいて「男丁」と「女丁」に分け、それぞれ身分職役別の口数を記載している。男丁の冒頭は以下のとおりである。

男丁、貳万玖千柒拾口内

朝官、肆内壮参・老壹、守門将、壮壹、宣伝官、貳内壮壹・老壹……

朝官、守門将といった身分職役ごとに口数とその壮・老・弱別内訳が載せられている。男丁に登場する身分職役は130種⁽³²⁾にのぼる。その配列は、朝官・守門将など官職保持者にはじまり、幼学・校生・御営軍・駅吏・鑰匠など多種多様な職役が120種以上ならぶ。その後に各司寺奴・営府官奴・院奴・校奴・駅奴・私奴と奴がつづき、私奴の後の男丁末尾に「各寺僧人、柒百肆拾口」と僧の口数が記されている。大きく、良身分・奴・各寺僧人の順に配列されているのである。

前述のとおり18世紀前半期の僧戸秩寺庵には良僧と奴僧がともに記載されていた。1720年の僧戸秩をみても、桐華寺などには良僧・奴僧がいて、僧の良賤身分が明示されている。しかしながら、同式年の都已上条において僧は良身分職役にも、奴のなかにもいれられず、僧人として一般の良賤身分の外に位置づけられていたわけである。

(32) さらに兼役で重出するものを含めるとのべ266種程度になる。

さらに、18世紀後半になると都已上条に僧の記載自体がみられなくなる。都已上条は1720年以降では、1750年から1876年までの16式年分あるが、そこには僧・僧人はまったく登場しない。都已上条はその記載内容が示すように各種役負担と関係する。僧にしても義僧役・義僧防番銭をはじめとする各種僧役を負っていたのであり、都已上条に載せてもおかしくはない。⁽³³⁾にもかかわらず、18世紀後半以降は、僧を都已上条に収載していないのであり、僧は一般戸口の身分職役編成の外に置かれるようになったといえよう。

ここまでの大丘府戸籍大帳僧戸秩に関する検討の結果をまとめておこう。

まず、戸籍大帳が寺庵と僧をどのように把握していたのかという観点からいえば、戸を単位に人々を記載するという朝鮮戸籍大帳の基本原則は寺庵と僧にも貫徹されていた。僧戸は一人の僧を戸主とし、戸主僧単独、あるいは戸主僧にくわえその上佐を記した。寺庵内の個々の僧をその上佐とともに戸として把握していたわけである。

ただし、寺庵はすべて各式年末冊末尾近くに置かれた僧戸秩にまとめられ、通常の面里編成の外にあった。また、一般戸が5戸を単位に統にまとめられているのに対し、僧戸秩戸は作統されていなかった。

僧戸内部の記載内容・書式も僧戸に特有のものであった。一般戸の戸主が四祖ないし四祖と母を載せるのとは異なり、戸主僧の祖先記載は当初良賤を問わず父と母を記載するだけで、さらに19世紀までには母の記載が消えて父のみを記すようになっていた。18世紀以降、戸主僧の師名が記載されている点も僧戸に固有の特徴である。

18世紀前半期までは戸主である僧に良僧と奴僧があり、奴僧の場合、寺奴・私奴の別に応じて所属先や主（上典）名が記載されていた。これは僧となっても良賤身分制の枠内にあり、戸籍大帳が各僧の良賤身分上の位置を把握しようとしていたことをさしあたりは意味する。しかしながら、18世紀前半の都已上条において僧が通常の良賤身分とは区別された僧人として挙げられていたことからうかがわれるように、その身分的位置にはあいまいなものがあつた。さら

(33) 朝鮮後期の僧役については、吳京厚「朝鮮後期僧役의 類型과 弊端」(『国史館論叢』107、2005年)などの研究がある。

に、18世紀後半以降の都已上条においては僧は記載されなくなり、また僧戸秩においても僧の良賤表記が消えていく。戸籍大帳上において僧を一般戸口とは異なる社会集団として把握する傾向がより強まっていったのである。

僧戸記事はこの時期の寺庵と僧の具体相についても貴重な情報を提供する。僧の出自が明記される18世紀前半期までについていえば、奴婢を含むさまざまな階層の出身者が僧となっていたことを確認できる。私奴出身で総撰・嘉善大夫にまでのぼる僧がいたように、あるいは良身分上佐の師僧が奴僧であることもあったように、僧となることは身分出自による束縛から脱する契機でもあったようである。また、同時期の僧戸秩には居士など僧ではない者も登場し、寺庵社会の多様性をうかがうことができる。

一方で、寺庵戸数の固定傾向や19世紀後半期の年齢の不自然さなどは、戸籍大帳の記載内容のすべてを実態と等値することの危険性を示している。この点にも留意しつつ、次節では蔚山府戸籍大帳の僧戸記載を検討することにしよう。

(続く)

(本稿は科学研究費補助金の助成を受けた「朝鮮新式戸籍に関する史料学的研究」(基盤研究C・20520613・研究代表者:山内民博)の成果の一部である。)